大衆の粛清：
Sanctuary における知識階級と社会決定論

森　　有　礼

I

ひと言で言えば，William Faulkner の *Sanctuary* (1931) は，現代のアメリカにおける悪の寓話である。この作品における悪の主題は，例えば "the male's discovery of evil and reality is bound up with his discovery of the true nature of woman. . . . women have a secret rapport with evil which men do not have . . ." (127-28) と論じる Cleanth Brooks の様にそれを現実の女性性の本性と考えることもできよう。或いは "Not only is there no justice, no law, and virtually no civilization in *Sanctuary*, there is also no justification of evil. It simply exists, infecting everyone" (51) と述べる Eric J. Sundquist の様に，荒廃した現代のアメリカ南部における楽園喪失の主題を背景として，そこに現代の悪の不条理を読み取る批評家もいる。

だが，*Sanctuary* は単にその様な意味での悪の寓話でしかない訳ではない。例えば富山太佳夫は，この作品を犯罪人類学と優生学との交差点と位置付ける (160)。この二つの学問は必然的に社会と「悪なるもの」との相関性を追及する。だがその接近法は，共に膨大な事例を対象として考察を重ね，実証的に犯罪とその犯人の類型を分析するという点において，また遺伝学の理論に則って人間の様々な形質の継承とその影響を広範な分野に渡って検証するという点において，科学的であると考えられた。この種の「科学的」考察において，悪は純粋に抽出し得る何らかの本態と見做されていた。これらの学問の研究対象として，悪とは倫理的，道徳的或いは宗教的に抽象化された観念ではなく，具体的な症例であった。近代科学主義の出した一つの解答としての悪の諸相が，そこにはある。

だが，実証主義科学の手法を採って悪の形相を追及するこれらの学問がひと度悪なるものを希求するある種の衝動と結び付いた時，それはその衝動を正当化する強力な手段となる。実際，19世紀末から20世紀初頭にかけての社会はその様な手段を模索していた。

断定すれば，悪を希求していたのは当時の社会における知識階級であり，規定されるべき悪とは19世紀において爆発的に増加した大衆であった。無論この試みは，殆ど一方的に前者から後者へ向けてなされたものであった。だが，知識階級が手にしたこの理論武装は，大衆自身をも欺き，説得するのに十分な効果を発揮した。犯罪人類学と優生学という二つの学問によって顕在化させられた悪の姿を，そこに含まれる自らへの攻撃と悟ることなく，大衆は再び新たな

る自らの metaphor として受容するに至ったのである。

本論の目的は，*Sanctuary* をこの様な現代の悪の寓話として読むことで，今世紀的悪の規定と受容の過程とその問題を考察するものである。まずは，この作品がおかれた当時の社会的背景の詳察から始めたい。

II

19世紀末から20世紀初頭の西欧世界において，爆発的に増加した大衆(masses)の粛清は当時の知識階級(intelligentsia)にとって半ば強迫的テーマであった。スペインの哲学者 José Ortega y Gasset は，彼の1930年の著書 *The Revolt of the Masses* の冒頭で，大衆の擡頭について次の様に峻烈な口調で語っている。

> There is one fact which, whether for good or ill, is of utmost importance in the public life of Europe at the present moment. This fact is accession of the masses to complete social power. As the masses, by definition, neither should nor can direct their own personal existence, and still less rule society in general, this fact means that actually Europe is suffering from the greatest crisis that can afflict peoples, nations, and civilisation. . . . It is called the rebellion of the masses. (7)

Ortega は大衆を，自らにはその資格も能力もないのに，ただその数を頼みに社会における覇権を要求する存在と見做している。このような存在に対して彼が抱くのは，社会が凡俗なレヴェルにおいて均質化されることの，そしてその凡俗さが社会規範としてその全構成員に対し強要されてゆくことの恐怖と嫌悪である。

> *The characteristic of the hour is that the commonplace mind, knowing itself to be commonplace, has the assurance to proclaim the rights of the commonplace and to impose them wherever it will.* As they say in the United States: "to be different is to be indecent." The mass crashes beneath it everything that is different, everything that is excellent, individual, qualified and select. Anybody who is not like everybody, who does not think like everybody, runs the risk of being eliminated. (12)

Ortega が言うところの "everybody" とは，「甘やかされた子供(the spoiled child)，反逆する未開人(the primitive in revolt)或いは野蛮人(the barbarian)」(71)も同然の大衆である。ここで彼は自らの論を，現代社会において勝利を収めつつあるこれらの存在に対する彼等知識階級の正面攻撃の予備段階と位置付け，さらなる全面攻撃の必要性を説いている。彼にとって大衆とは，知識階級が維持してきた文明とそれを築いた彼等の階級の貴族的特権を護るために是非とも粛清せねばならない敵対者であった。

大衆に対するこの様な憎悪と危機感は，Ortega に限らず当時の知識人の間で広く共有され

ていた。John Carey によれば，Ortega の警告した大衆の擡頭の展開は，人口過密（overcrowding），侵入（intrusion），大衆による独裁（the dictatorship of the mass）の三点に要約される。人口過密は最善の人々の文化が築いた場所への一般人の侵入をもたらす。その結果，社会の覇権が大衆の手に落ち，個人が抑圧されることとなるのである(3)。

この様な今世紀の大衆を特徴付けるのは，普通教育の普及とそれに伴う識字能力（literacy）の獲得であり，この特徴が19世紀末から20世紀にかけての大衆文化の繁栄をもたらした。そしてこの文化を支えたのが新聞，映画，通俗小説等に代表される商業主義的出版広告業界，いわゆるマス・メディア，文字通り大衆に供するメディアなのだと Carey は言う。しかして「粗野な」大衆文化と高踏的知識階級の文化の間には越え難い溝が生じた(5-9)。そしてこの知識階級は，「彼等の」社会を蝕む大衆に対し，Ortega の予言した攻撃を加えてゆくこととなる。彼等のうち比較的穏健な戦術を展開した者達として，Carey は例えば教育制度の拡充，殊に女性や無産階級の人々のための教育の普及を嘆く H. G. Wells (5-6)，T. S. Eliot (15)，George Moore (16) や，社会をその許容性の有無によって卓越者（the illustrious）と一般大衆（the vulgar）とに再階層化してゆく現代芸術の担い手達— Virginia Woolf や James Joyce —を挙げている(16-22)。だが，より過激かつ徹底的な攻撃の手段として問題にされるべきは，当時に知識階級の中にあった，文字通りの「大衆の抹殺」を希求する思想的風潮である。

Carey の指摘によれば，当時の知識人にとって大衆は殆ど個人としての識別の不能な一種の集合体，また「蛮人，女や子供，細菌或いは動物（savages, women, children, bacilli or animals）」(31) も同然の存在，要するに「生きているとは完全には言えない（not fully alive）」(10) 者達であった。彼等をこの様に半ば以上死んでいると見做すことは，知識階級の大衆粛清の夢想をより掻き立てた(11)。自らに益することがないばかりではなく，生理的嫌悪感すら伴った憎悪を抱かせる大衆に対して知識階級が抱いた粛清衝動の極例として，Carey は Nietzsche，D. H. Lawrence，Windam Lewis 等の思想を挙げている。彼等の目指すのは，知識階級を成す「生得的貴族社会（a natural aristocracy）」(71) の世界である。それは例えばNietzscheの希求する強き者，良き者のみからなる世界，即ち全き男性原理の基に形成される "health-and-fitness fetish" (75) として具現化される，高貴な血統の社会であった。その様な思想は，Nietzsche の言葉を借りれば，社会の「落伍者の全滅（the annihilation of millions of failures）」(506) を必須条件とする。またその様な粛清の衝動は，以下に引いた Lawrence の1908年の書簡にも既に窺える。

> If I had my way, I would build a lethal chamber as big as the Crystal Palace, with a military band playing softly, and a Cinematograph working brightly; then I'd go out in the back streets and main streets and bring them in, all the sick, the halt, and the maimed; I would lead them gently, and they would smile me a weary thanks; and the band would softly bubble out the 'Hallelujah Chorus'. (81)

Nazi のガス室を彷彿させる Lawrence の「処刑室(a lethal chamber)」は，身体・精神障害者といった社会的弱者を除去するためのものとして描かれている。この種の「社会的不適格者(the socially unfit)」の大量殺戮の幻想が Hitler によって現実のものとなってしまったことは厳然たる歴史的事実であるが，その狂気において問題なのは，その殺戮が民主的手続きを経て合法化され，また高度に組織化された近代的官僚制度の下で機能したという事実，つまり実質的に社会的承認と賛同を得て実行されたという事実であり，またその際にいわゆる「科学的根拠」として当時のさまざまな社会思想が援用されたという事実なのである。富山の指摘によるまでもなく，その一大潮流を成した思想が，Darwin 進化論に端を発し，Herbert Spencer を祖とする一連の社会進化思想(social Darwinism)であったことは今更言うまでもない(145-51)[(1)]。

この思想の基礎にあるのはもちろん Francis Galton による優生学(eugenics)である。それは Darwinism の基本原理である，生存競争における自然淘汰と最適者生存を言わば人為的に操作することによって徹底させる実践であった。その目的は，Carl N. Degler の言葉を借りれば「人種改良(improving the race)」(43)にある。生得的特質の子孫への継承という Mendel 遺伝学の理論が一般化された19世紀末以降，生存競争を通じてより良き社会への進歩を提唱する社会進化論と，「劣悪種」の排除によってその社会への悪しき影響を取り除き，社会進化論の唱道する進歩を促そうとする優生思想とは，弱者排斥を希求する知識階級の欲望を実現するための言わば車の両輪足り得るものであった。言うまでもなくこの思想は，その意図においてDegler が指摘している通り矯正主義的(reformist)なものであった。それは個人主義に対し，社会的責任とその利益を優越させたものであり，したがって必然的に干渉主義的かつ功利主義的側面を持っていた。ひと言で言えば，大衆の改良によって彼等を知識階級と同等の基準まで進化させようと意図する優生思想は，その根幹において多分にエリート主義的(elitist)であったのだ(Degler 42)[(2)]。そして獲得形質の遺伝を提唱する Lamarck 遺伝学が，1889年以降 August Weismann 等によって否定されることで教育による「劣悪種」の矯正と進歩の可能性が退けられると共に，優生学は一気に，殊にアメリカにおいて大勢の支持を得(Degler 20-24)，1915年までには熱狂的流行(a fad)の次元に至った(Hofstadter 161)。

この背景には，例えば以下の一節に窺える様に，非アングロ・サクソン系移民の流入による，アメリカ社会の知的・環境的水準の低下に対する強い危機感がある。

> Doubtless the rapid urbanization of American life, which created great slums in which were massed the diseased, the deficient, and the demented, had much to do with the rise of eugenics. . . . As more and more diseased and defective families in great cities came to the attention of physicians and social workers, it was easy to confuse the rising mass of known cases with a real increase. The influx of a large immigrant population from peasant countries of central and southern Europe, hard to assimilate because of rustic habits and language barriers, gave color to the notion

> that immigration was lowering the standard of American intelligence . . . The apparent economic deceleration at the end of the century was also seen by many observers as the beginning of a national decline; and it was in accordance with the habits of a Darwinized era to find in this apparent social decline a biological deterioration associated with the disappearance of "the American type." (Hofstadter 162-63)

ここまで来れば，優生学と人種，民族，国籍等による差別との関係性は明白である。20世紀初頭のアメリカの帝国主義的風潮にあって，いわゆるWASPの人種的優位とそれに基付く拡張主義政策，さらにその風潮の言わばnegativeな顕在化としての各種移民法の成立は，明らかに優生学という「科学的根拠」に根差すものであった。Deglerは，知能テストによって得られた人種間や民族間，殊に東欧，南欧系やロシア系ユダヤ人或いは黒人とアングロ・サクソン系との成績差が人種・民族隔離政策の根拠の重要な要素の一つであり，それが社会の等質性(social homogeneity)或いは純粋性を希求する当時のアメリカの風潮を助長していたことを看破している(48-55)。

一方で，アメリカにおける優生学は自国民に対しても容赦なかった。矯正不能な劣悪素因は遺伝によってその子孫へと受け継がれ，新たなる犯罪と国家の損失をもたらす。ならば，これら劣悪種は優生学的見地からして，社会から抹消されねばならない(3)。その衝動は，1907年のIndiana州を初めとしてその後20余年の間に全米30州において断種術が法制化されることで現実のものとなった。しかもその過程で，本来遺伝的素因に起因する犯罪を減少させるための措置であった筈の断種術は，精神遅滞者や身体的不適応者(the defective and physically unfit)の増加を規制する手段へとすり替えられた(Degler 45)。この様に「精神薄弱という現象と遺伝学の応用と犯罪学を一挙に結びつけて」(富山 140)しまうことで「社会的不適応者」というものを規定・排除してゆくことが，アメリカが採った優生学的社会衛生向上の手段であった(4)。

こうして見ると，*Sanctuary* 以前のFaulknerの代表的二作品— *The Sound and the Fury* (1929)と *As I Lay Dying* (1930)—にも，この様な優生学的文脈を読み取ることができる。例えば，*The Sound and the Fury* においてJason Compsonに「偉大なるアメリカ産去勢馬("the Great American Gelding")」(263)と形容される白痴(idiot)のBenjyは，そのinnocence故に姉Caddyと近所の小学生の少女とを混同して襲ったため去勢される。また，七月の炎天下に一週間以上もかけて腐乱した亡母の遺体を馬車で運ぶという暴挙を止めさせようと，その遺骸を安置してある納屋に放火したために狂人扱いされるDarl Bundrenは，実際にその衝撃のために発狂する。そしてこの両者が最後にたどり着く場所が共にJacksonの精神病院だと言うこと("Our brother Darl in a cage in Jackson" [*As I Lay Dying* 254] / [Benjy was] "Committed to the State Asylum, Jackson" [*The Portable Faulkner* 719])は，物語における単なる偶然などでは断じてない。彼等の存在も，その末路も，等しく当時のアメリカの辿った歴史と照応しているのだ。

だがここで忘れてはならないのは，優生学の持つ社会衛生の観点は，自然界における淘汰原理を人間社会に適用したSpencer的社会進化論がそうであったのと同様に，こよなく寓意的であったということである。今ここでその医学的根拠の正否は問わないが，本来遺伝による犯罪素因の拡散の防止を目的とした断種法が，結果として不適応者を社会から隔離することを正当化するために機能した例に窺える様に，優生思想の実践は社会悪としての不適格者を探し求める行為となる。しかもその対象は純粋な医学的，遺伝学的見地から抽出されるのみならず，多分に比喩的にも規定される。その典型例が，人種的偏見と国粋主義的熱狂が優生思想と結託して生まれた移民法である。この段階では既に，悪はそれを見出さんとする者にとって，ありとあらゆる形をとって顕現してくる。犯罪者や精神遅滞者，身体或いは精神障害者は言うに及ばず，アルコール中毒者，売春婦，不義者，外国人，スト破り，共産主義者，非キリスト教者，性的逸脱者或いは密造酒作り等々。そして彼等のいずれもが，優生学的見地によれば自らの中に何らかのこれら反社会的素因を継承していることになる。ここまで来れば，優生学は紛れもなく道徳律に基付いた決定論的因果論である。だがこの様な因果関係構築の衝動こそが，優生思想の根幹を支えていたのだ。

形質の遺伝的継承を唱えたMendel遺伝学は，しかしアメリカにおいて実践的優生学へと変貌することによって言わば魔女裁判のための範例となった。だが，現代の魔女狩りは極めて「民主的」な方法で行われることもまた付け加えておかねばなるまい。断種法や移民法の制定はその民主性の代表例ではあるが，この様な「民主的」手続きこそ，独り世を憂う知識階級にとって最後まで越えられない壁だったのだ。それは，彼等が社会において絶対的にminorityの立場にあったからに他ならない。集合的・非人格的な大衆に対し，あくまで個人としての，それゆえminorityの立場を崩そうとしなかった彼等は，「民主」社会にあっては必然的にその政治力を失ってゆかざるを得ない。それは大衆として，また集団としてのmassesと，individualとしてのidealistic aristocracyとの対立でもあった。

次節では，この様な歴史的文脈に沿って*Sanctuary*を読んでゆく。この読みが目指すのはこれらの歴史的文脈がこの小説においていかにその寓話的realityを保証しているかを検証することであるが，そのためにはこの物語の主人公である弁護士Horace Benbowが挑む法廷闘争から論を進めてゆくべきであろう。

III

*Sanctuary*全編を通じて展開するのは，弁護士Horace Benbowがアメリカ社会に対して挑む一種の闘争である。物語の軸を成すのは彼が担当する殺人事件である。南部の田舎町Jefferson郊外のthe Old Frenchman placeと呼ばれる酒密造者一味の巣窟で，Tommyと呼ばれる男を射殺した容疑者として逮捕された一味の首領Lee Goodwinと，その内縁の妻Ruby Lamar及

びその赤児を救おうと，Horace は彼の弁護を買って出る。これに対し，Jefferson の住民達は Ruby を不義の罪を犯した女として迫害する。また Horace の妹 Narcissa は，彼がこの様な「体面の悪い」事件に係わるのを止めさせるため，法廷闘争における Horace の敗北を画策する。Goodwin の容疑は濡れ衣であって，真犯人はこの巣窟に紛れ込んだ女子大学生 Temple Drake を玉蜀黍の穂軸で強姦しさらに Memphis の売春宿に監禁した Popeye と呼ばれる男である。しかしこの物語において問題となるのは何が真実であるかというではなく，むしろ何がもっともらしく聞こえるかということ（verisimilitude）である。Goodwin 夫妻を罪びととして引き合いに出した説教に対し Horace は次の様に憤慨して見せる。

> This morning the Baptist minister took him [Goodwin] for a text. Not only as a murderer, but as an adulterer; a polluter of the free Democratico-Protestant atmosphere of Yoknapatawpha county. I gathered that his idea was that Goodwin and the woman [Ruby] should both be burned as a sole example of that child [their baby]; the child to be reared and taught the English language for the sole end of being taught that it was begot in sin by two people who suffered by fire for having begot it. Good God, can a man, a civilised man, seriously... (128)

この一節が示しているのは，罪は贖い得ないものでありしかもそれは否応無く引き継がれてゆかねばならないという決定論的思想であり，それを裏打ちするのは道徳的な意味における罪（sin）と社会的なレヴェルにおいて論じられるべき罪（crime）とを同一視し，一方の罪が他方の罪を常に内包しまた表象しているという多分に寓意的な信仰である。この因習的な不条理さは，理想主義者でありまた法の番人を自認する Horace にとって決して容認できるものではない。だが，ここで着目すべきはむしろ，この説教の中で Goodwin 夫妻が "a text" として採り上げられている点である。もちろんこの場合の "a text" とは説教の主題を指す。しかし今あえてこの言葉が「解読されるべき texture」を意味すると解するならば，Goodwin 達を咎人と見做す Jefferson の住民の読みと，それを反人間的，非文明的であるとして抵抗する Horace の解釈とが *Sanctuary* の中で衝突しているのだとも言える。それはまた，社会という集団的存在の意志と個としての Horace のそれの対立，即ち無名性を帯びた大衆と知識人（an intellectual）Horace との対立でもある[(5)]。そしてその様な読みの対立は，物語の終盤の法廷闘争において頂点に達する。そこで両者の読みは文字通り審判を受けることとなるのである。

だが，この裁判において敗北するのが Horace の側であることに疑念の余地はない。なぜなら，恐らくこの小説の中で唯一彼だけが，裁判の判決というものの恣意性を十全に理解していないからである。裁判とはその本質において，生じた事例の再現前化（representation）とその承認（authorization）以上の何ものでもない。したがって，そこにおける勝利は多分に修辞的なものとならざるを得ない。何が真実であるかを問うことよりも，むしろいかに説得力を以て相手を論駁するかがその焦点となるのである。そこには Horace の盲信する絶対的正義の観念は

ない。しかもその判決が陪審制という極めて「民主的」な手続きによって支持される以上，物語において絶対的少数派である彼の主張が結果的に擁護されることはあり得ない。まずこの点について検証しておきたい。

Horace にとって実質的に最大の難敵は，彼の妹である Narcissa であろう。前述の様に，彼女は兄 Horace が密造酒作りにして姦通者である Goodwin とかつて売笑婦であったその妻 Ruby に係わることが我慢できない。彼女が，Goodwin の一件に巻き込まれている Horace に良からぬ噂が立つことで Jefferson における自分の家名や体面が穢されることを恐れている様子は，"But I cannot have my brother mixed up with a woman people are talking about. . . . I dont see that it makes any difference who did it. The question is, are you [Horace] going to stay mixed up with it?" (184)という彼女の言葉に窺える。Goodwin 一家の運命に対するこの様な彼女の無関心と自己保身の態度は，Ortega がアメリカ合衆国の大衆に窺える特徴として指摘する "to be different is to be indecent" (12)という観念の典型例と言える。だが，彼女のこの無関心な冷徹さと世俗性の方が，"I cannot stand idly by and see injustice—" (119)と息巻く Horace の naïve な正義感よりも，遙かに実際的影響力を持つのである。例えば，Horace をしてこの件から手を引かせるために Goodwin と Ruby が正式な夫婦でないことを教区の婦人連に漏らし，さらに彼女達を扇動して Ruby とその子供を逗留先のホテルから追い出したも彼女であった (Brooks 128)。さらに周到にも，彼女はこの事件の裁判に先んじて，予め事件を担当する地方判事 Eustace Graham から Horace 敗訴の確約を取り付けようとさえするのである。

> "I [Graham] only wish it weren't your brother," he said. "I hate to see a brother-in-arms, you might say, with a bad case." . . . "After all, we've got to protect society, even when it does seem . . ."
>
> "Are you sure he cant win?" she [Narcissa] said. . . . "You have good reason to think he cant. I suppose you know things about it that he doesn't." (263)

執拗に Horace 敗訴の言質を求める Narcissa に，Graham は次の様にそれを確約する。

> "This is purely confidential. I am violating my oath of office; I wont have to tell you that. But it may save you worry to know that he hasn't a chance in the world. . . . We happen to know that the man is guilty. . . ."
>
> "So the quicker he loses, the better it would be, wouldn't it? . . . If they hang the man and got it over with. . . . I have reasons for wanting Horace out of this case. The sooner the better. . . . I just want Horace out of this business as soon as possible." (263-64)

事件の真相に照らせば，Graham の掴んだ有罪の確証というものが偽りであることは言うまでもない。だが問題なのは，体裁を繕うため Horace とこの一件との係わりを一刻も早く絶とうとする Narcissa の心算と，判事としての実績を挙げんとする Graham の目論見とが結果的に一致することである。"He [Graham] had been District Attorney but a short time, yet already

he had let it be known that he would announce for Congress on his record of convictions" (263) という一節にも窺える様に，彼にとって有罪確定の実績は自らの将来を約束する基盤となっている。しかも彼には地方判事として「社会を護る」(263) という大義名分が与えられている。この様な両者の利害関係の一致が，Goodwin に scapegoat の役割を強要することとなる。彼はこの裁判を成立させるためにのみ，殺人事件における被告とされるのである。この様に恣意的に構成された因果関係は，この事件におけるもう一人の被害者と目される Temple の偽証として顕在化する(6)。

Tommy 殺害に引き続いて生じる Popeye による Temple 凌辱の場面は，例えば Laura E. Tanner が言うところの "a gaping hole in the text that the reader must fill in" (561) である。この空隙を法廷において再現前化するのが Graham によって仕組まれた Temple の証人喚問の場面である。しかしその際にも Graham はこの場面の詳細の記述を念入りに避け，その場面の再構成を陪審員の想像に任せるよう仕向ける (Tanner 569)。

> The district attorney [Graham] faced the jury. "I offer as evidence this object which was found at the scene of the crime." He held in his hand a corn-cob. It appeared to have been dipped in dark brownish paint. . . . "You have just heard the testimony of the chemist and the gynecologist—who is, as you gentlemen know, an authority on the most sacred affairs of that most sacred thing in life: womanhood—who says that this is no longer a matter for the hangman, but for a bonfire of gasoline—" (283-84)

Graham が暗示しているのは玉蜀黍の穂軸による Temple の凌辱である。そしてこの後に続く喚問で Temple の Goodwin による Tommy 殺害の偽証の際に，Goodwin の有罪は確定的となる。

> . . . he [Graham] caught her [Temple's] gaze and held it and lifted the stained corn-cob before her eyes. . . .
>
> "Did you ever see this before?"
>
> "Yes."
>
> The District Attorney turned away. "Your Honor and gentlemen, you have listened to this horrible, this unbelievable, story which this young girl has told; you have seen the evidence and heard the doctor's testimony: I shall no longer subject this ruined, defenseless child to the agony of —" (288)

実際には，Temple の証言が，彼女を凌辱したのが Goodwin であると明言している訳ではない。それにも拘わらず彼に有罪の判決が下るのは，一つには Tommy 殺害についての偽証のせいもあるが，それよりも Graham がここで用いた，この事件に関する陪審員，即ち一般市民の予断に訴えるという修辞的戦術に負うところが大きい。Goodwin を既に道徳的には罪びとと見做している社会の先入観を利用して，彼がその期待に違わずいかに残酷な所業を成したかを

扇情的に暗示することで，Graham は罪びとでありまた殺人者である Goodwin と Temple 凌辱の事実との間の因果関係をも示唆しているのである。そして一旦この図式が陪審による評決という形を採って「民主的」に承認されてしまえば，Horace の主張などもはや何の効力も持ち得ない。こうして見ると，この裁判において社会の，即ち大衆の期待する因果関係を提示することに成功した Graham の修辞術の前に，彼等の賛同を得られなかった Horaceの 読みが敗北を喫するのは言わば当然の結果である。それは，大衆と敵対したがためにその圧力に屈せざるを得ない知識階級＝個人の姿をも示唆している。

同時にこの敗北は，Horace の，大衆社会に対する盲目さにも起因する。理想に迷った彼には，例えば裁判費用として自らの身体を供しようとする Ruby の意図を理解することは不可能である。だが，この社会において現実に人々を動機付けるのは，彼女が適確に理解している様に，明確な金，つまり資本の論理なのだ。その例として，ここで Jefferson の上院議員 Clarence Snopes の正義がどの様な価値観に依っているのかを見てみよう。

Snopes は Popeye に連れ去られた Temple が Memphis の売春宿にいることを嗅ぎつけ，その情報を Horace，Temple の父 Drake 判事，Memphis のユダヤ人弁護士にそれぞれ売りつけようとする。以下に挙げるのはそのユダヤ人弁護士に対する彼の意見である。

> But the lowest, cheapest thing on this earth aint a nigger: it's a jew. We need laws against them. Drastic laws. When a durn lowlife jew can come to a free country like this and just because he's got a law degree, it's time to put a stop to things. A jew is the lowest thing on this creation. And the lowest kind of jew is a jew lawyer. And the lowest kind of jew lawyer is a Memphis jew lawyer. When a jew lawyer can hold up an American, a white man, and not give him but ten dollars for something that two Americans, [Horace and Judge Drake] Americans, southern gentlemen . . . when they give him ten times as much for the same thing than the lowlife jew, we need a law. (265-66)

この一節には，例えば移民法を貫流する差別主義思想の典型例の様なユダヤ人蔑視の態度がありありと窺える。だがここで注意すべきは，その様な偏見の原因が Snopes が交渉したユダヤ人弁護士の金払いの悪さにあるという点である。「文盲の家系(that illiterate race)」(205)を出自とし，"a picture of stupid chicanery and petty corruption for stupid and petty ends" (175)と戯画化される Snopes の価値観，殊に倫理感は，結局のところ単なる卑賤な拝金主義と，人種・民族差別の表れに過ぎない。

その様な基準がより露骨な形で表された一節として，Memphis の売春宿の遣手婆 Miss Reba が Temple の流した virgin blood に対して与える "That blood'll be worth a thousand dollars to you" (145)という言葉がある。売春宿における価値基準が金額によることは言うまでもないが，ここではそれがさらに露骨に商品価値として提示されている。これらの態度はまた Graham の

主張する大義を支える原理をも示唆するが，これらの例に伺えるこの作品中の社会の状況を，Michael Millgate は以下の様に要約している。

> [in the world of *Sanctuary*] the entire system of justice, of law and order, is inextricably implicated in the social and moral corruption . . . Judges use their power and influences to circumvent due process. District Attorneys seek convictions on any terms and for purely personal ends. Lawyers, purchasable either by money or by sex, operate by secret manipulation rather than by courtroom argument and are often as corrupt as the clients they serve. . . . Along with police chiefs and detectives, lawyers seem also to provide Miss Reba's brothel with some of its best and most regular customers . . . (161-62)

Horace はこの様な退廃した社会の悪に屈したとも言えない訳ではないが，それよりもむしろ，*Sanctuary* においては Horace に敵対する社会を体現する存在は常に悪の諸相を表す者として描かれていると言ったほうが分かり易い。例えば，世間体を気にする Narcissa の「閉鎖性（imperviousness）」（119）は，翻って Ruby 母子を迫害する因習的な Jefferson の姿を代弁している。言うまでもなく，この様な彼女の態度は Ortega が指摘する典型的大衆人のそれである。さらに Goodwin 一家を破滅に追い込む原因となる Popeye や Temple も，同じく彼等一家にとって害意ある（malignant）存在として描かれている(7)。

この様に *Sanctuary* においては，Horace と Goodwin 一家に降り掛かる厄災はこれら社会における様々な悪の化身によってもたらされるという図式が成り立っている。その意味において，彼等は一貫して社会から排斥され，虐げられる存在なのだ。そしてその厄災は，最終的に Goodwin をリンチする暴徒の姿として決定的打撃を彼等に加える。Goodwin の裁判に敗れた Horace は，その夜暴徒と化した Jefferson の市民が，Goodwin を留置場から連れ出し，火の付いた石油缶を背負わせて焚刑に処する現場に遭遇する。

> He [Horace] could see the blaze, in the center of a vacant lot where on market days wagons were tethered. Against the flames *black figures showed, antic* . . .
>
> He ran into the throng, into the circle which had formed about a blazing mass in the middle of the lot. From one side of the circle came the screams of the man about whom the coal oil can had exploded, but from the central mass of fire there came no sound at all. It was now *indistinguishable* . . . (296, emphases added)

集団化した暴徒による Goodwin のリンチは，それ自体個人として無力な Horace や Goodwin 達の敗北を意味する。だがこの暴徒の「不気味な」「判別不能な」姿を次の様な Ortega の言葉の下に見てみれば，それは大衆社会アメリカのグロテスクな戯画となる。

> When the mass acts on its own, it does only in one way, for it has no other: it lynches. It is not altogether by chance that lynch law comes from America, for Amer-

> ica is, in a fashion, the paradise of the masses. And it will cause less surprise, nowadays, when the masses triumph, that violence should triumph and be made the one ratio, the one doctrine. (84-85)

これらの引用が示すのは，大衆とは言わば匿名性を帯びた暴力的な悪であり，その悪を利用して Horace の様な知識人＝個人を抑圧するのが，やはり大衆の側に与し，大衆と共生する者達，即ち Graham であり Narcissa と言った存在であるということである。つまり，*Sanctuary* が描き出すこの様な社会は，Ortega が脅威とした「(知識人としての) 個人を抑圧する大衆の過激な民主主義(hyperdemocracy)」(Carey 3-4)の世界なのである(8)。

しかしながら，*Sanctuary* の物語世界を社会悪の集合体として寓意化しているのは Ortega や Horace に代弁される知識階級の側の視点であることを見落としてはならない。しかも，この作品の中で繰り広げられる個人と社会，知識階級と大衆といった対立の中で，これら前者を迫害する後者は，通常の寓話の類型にある様に単に抽象的観念の人格化した存在として登場するのではなく，知識階級が措定する形で悪を具現する具体的形象を伴って描かれる。そしてその様に悪の形象を規定する尺度として用いられるのが，富山の指摘する通り，決定論思想と結託した様々な社会科学理論，即ち犯罪人類学であり，社会進化論であり，さらに両者の実践的手法として結実した優生思想である。

これらの社会思想の見地に立てば，*Sanctuary* において社会悪を体現する者はなべてそれと認識される特徴を備えている。これらの諸特徴は言うまでもなく社会が規定する悪の形相なのだが，例えばそれは以下の引用に見られる Popeye の様子に窺える。

> Popeye might have been dead. He had no hair at all until he was five years old, by which time he was already a kind of day pupil at an inst itution: an undersized, weak child with a stomach so delicate that the slightest deviation from a strict regimen fixed for him by the doctor would throw him into convulsions. "Alcohol would kill him like strychnine," the doctor said. "And he will never be a man, properly speaking. With care, he will live some time longer. But he will never be any older than he is now." (308)

この一節で語られる Popeye は，Lawrence や Nietzsche にすればまさしく死んだ方がましな程の存在，即ち虚弱な特異体質で，しかも精神遅滞さえほのめかされた，およそ一人前の人間には及ばない類いの人間，要するに彼等の階級にとっての社会的不適格者に過ぎない。さらに追い打ちをかける様に，彼が繰り返し行う愛玩動物虐待の挿話によって，彼の人間性が矯正不能(incorrigible)な悪であることが暗示される。

> On the floor lay a wicker cage in which two lovebirds lived; beside it lay the birds themselves, and the bloody scissors with which he [Popeye] had cut them up alive.
>
> Three months later, at the instigation of a neighbor of his mother, Popeye was

arrested and sent to a home for *incorrigible* children. He had cut up a half-grown kitten the same way. (309, emphasis added)

この挿話は，"that vicious depthless quality of stamped tin" (4) と形容される彼の為人を言わば裏付けていると言える。そして Goodwin 同様 Popeye が冤罪で処刑される理由をこれらの挿話から類推するならば，それは知識階級が抱く大衆の，殊に社会的不適格者の粛清の衝動にあると言える。前節でも述べた様に，酒密造者と娼婦の組み合わせからなる Goodwin 一家が，当時の社会の道徳律によれば明白に反社会的存在であったことは言うまでもないが，優生学の決定論的視点から見て社会の退廃と堕落の原因である悪を体現する Popeye もまた，明確に当時の社会における不適格者なのである。さらに彼のこれらの精神的，肉体的な歪みは，文字通り彼の外観に現れた醜怪さ (deformity) にも窺える ("His skin had a dead, dark pallor. His nose was faintly aquiline, and he had no chin at all. His face just want away, like the face of a wax doll set too near a hot fire and forgotten." [5])。

この様に社会の不適格者と見做されることで，Goodwin と Popeye に着せられた冤罪は決して不当なものではなく，むしろ社会が認める必然的帰結となる。ここまでくれば，Horace が Goodwin の裁判に固執した訳も容易に理解できる。彼が望んだのは実質的には勝訴ではなく Goodwin 達をも含む不適格者の粛清であり，その衝動の一貫した結果として最終的には Goodwin のみならず同様に反社会的な Popeye も粛清されることとなっていたのである。この意味において，彼等の冤罪は知識階級が彼等に押した社会的不適格者の烙印なのだ。しかも Horace の敗訴は，大衆に抑圧される個人の正義という図式に沿って，巧みに知識階級の立場を正当化している。もちろんこの敗北はこの過激な大衆民主主義の時代における彼等の階級の政治力の限界をも表してはいるが，同時に正にその事実によって自らを逆に迫害者の立場へとすり替えるのである。

この図式に従えば，Horace に敵対する社会は社会悪と見做される様々な deformity に満ちている。大衆人の戯画としての Snopes や Narcissa は言うに及ばず，Horace を敗北に追い込む Graham の「蝦足 (a club foot)」(275) や，Goodwin の仲間の「ポン引きや居候や阿呆達 (crimps and spungs and feebs)」(9)，さらには退廃と堕落の巣窟とも言える Miss Reba の売春宿と，そこで吐くまで他人の酒を盗み呑みする，Uncle Bud と呼ばれる弾丸形の頭部の白痴じみた少年。これらは単なる deformity の段階を越えて，犯罪人類学や優生学が規定し，また知識階級がその規定に則って倫理化した悪としての社会的不適格者の具体的な症例集となっている。この意味において，*Sanctuary* は道徳化された悪の寓話であると共に，ダーウィン的科学主義の名の下に顕在化した，知識階級にとっての多分に選民思想的な社会功利主義の寓話でもある。そしてこの小説において問題なのは，前節で論じた様に，この種の寓話は当時のアメリカ「大衆」社会に対し，知識階級の不適格者粛清の願望を十分に正当化し得るだけの説得力を持っていたのだという事実なのだ。

この寓話の中ではおよそこの種の規定を逃れられる存在はいない。Popeye による変態的な凌辱の被害者でもあると共に，物語におけるすべての犠牲者に対して直接，間接を問わず加害者的役割を果たす(Fiedler 87)と考えられる Temple も例外ではない。Miss Rebaの売春宿に連れ込まれて酒と性の快楽に惑溺する彼女の堕落しきった姿を評して Reba は言う。"But you know how. . . . . She'll be dead, or in the asylum in a year, way him and her go on up there in that room. . . ." (220)

Temple が体現するのは，単なる道徳的堕落と見做される類いの悪ではない。彼女の堕落は，そのまま死か発狂しか許されない状況へと直結する。彼女もまた，潜在的には Popeye 達同様，また前述の Benjy や Darl 同様，社会的不適格者の烙印を押されているのであり，それゆえ *Sanctuary* における加害者という「悪」の役割が与えられているのである(9)。

ここまで見て来た例はいずれも知識階級の規定する社会悪，即ち彼等貴族階級の社会を侵食し，文化の没落をもたらす大衆人の諸性質の具現化したものであると共に，19世紀末から20世紀初頭のアメリカ社会において，特に優生学的見地から広く容認された悪の徴候でもあった。それは社会衛生のため，或いは社会的損失を回避するという名目の下に不適格者という scapegoat を特定すべく大衆を巧みに扇動しつつ，まさにその扇動行為を通じて代償的に大衆自身を同様の疎外の図式に当てはめようとする規定者，即ち知識階級の意図をも反映している。そして *Sanctuary* がその様な知識階級の意図を明白に代弁している揺るがぬ証左として，Miss Reba の売春宿で Temple の退廃の様子を目の当たりにした Horace が絶望的につぶやく以下の一節を挙げておきたい。

> Better for her if she were dead tonight, Horace thought, walking on.
>
> For me, too. He thought of her, Popeye, the woman, the child, Goodwin, all put into a single chamber, bare, lethal, immediate and profound: a single blooting instant between the indignation and the surprise. And I too; thinking how that were the only solution. Removed, cauterised out of the old and tragic flank of the world. And I, too, now that we're all isolated; . . . the evil, the injustice, the tears. (221)

Horace が夢想するのは，Lawrence と同じく大衆の粛清である。その衝動は Popeye や Temple はもちろん，Ruby や Goodwin 達にさえ向けられる。"Mankind now appears to Horace as a malignancy that needs not only to be destroyed but to be 'cauterised.' Horace's use of this surgical term for the process of sterilization by burning implies that mankind represents an infectious contamination that requires the most drastic methods of extirpation" (31) という Doreen Fowler の指摘が表すように，人類，特に社会を細菌の様に汚染する大衆を焼灼(cauterise)せんとする Horace の意図は，知識階級の抱いたもっとも徹底的であり，しかしながらもっとも非現実的な目的と一致する。

今 *Sanctuary* を "The frontal attack [against the masses] must come in such a way that the

mass-man cannot take precautions against it; he will see it before him and will not suspect that it precisely is the frontal attack" (71) と語る Ortega の策謀を修辞的なレヴェルにおいて実践する小説と見做せば，それは彼等知識階級の持つこの様な大衆粛清の願望の寓話となる。この寓話は次の二つの側面を持つ。一方では大衆社会における知識階級の無力さであり，それは作品中の Horace の無力さと相通ずる。それは大衆の擡頭によって社会の支配的立場から退けられ，さらにこの社会の衆愚的な民主制に迫害されつつある知識階級の姿である。またこれは，大衆そのものを悪なるもの (a malignancy) と見做す知識階級の敵意の寓意化したものでもある。もう一つの側面は，彼等知識階級が，一方ではこの様な大衆の社会に内包されあるいは席巻されるのを拒みつつ，他方では多分に代償的ながら，その敵意でもってもうひとつ別の，社会的不適格者という迫害の寓話を作り上げることによってその一群を規定し，さらに大衆の意識を巧妙に操作することで彼等をも暗に攻撃しているという点である。そしてこの様な意識操作実践の手段として援用されたのが，当時熱狂的支持を得ていた優生学という「科学的」方法論に結実する社会功利思想であった。生物学的な種の改良を社会のそれへと適合させるこの概念は，極めて negative な過激さでもってまず不適格者の排除へと向かった。だが上に引用した Horace の独白が示すように，この「悪なる存在」の寓話は容易に知識階級の敵視する大衆社会それ自体へと敷延され得る。この点において，*Sanctuary* のもう一つの寓話の正体は，優生学を適用することにより民主的手続きを装って大衆に迎合される形の自己正当化を行いつつ，その大衆それ自体の粛清をも暗示する知識階級の戦略であったと言えよう。

IV

確認しておけば，*Sanctuary* は20世紀の知識階級にとっての悪の寓話であった。それは彼等の空間的，さらには社会的位置／地位を脅かす大衆の擡頭に対する彼等なりの攻撃の手段であった。自らを大衆の前に敗れ去る個人と規定し，またその大衆を自らにとっての悪と見做すことで，知識階級は自らの特権的立場を確認せんと試みたのだ。この様にして大衆に対する敵意を正当化せんとする彼等は，しかし社会にあっては絶対的少数派に過ぎず，それゆえ彼等の攻撃を実践するためには否応無く民主的な手段を採らざるを得なかった。そのための手段が社会進化思想でありまた優生思想であった。これらの思想は社会を適格者＝善と不適格者＝悪に冷徹に弁別し，後者の絶滅を正当化する。もちろんこの区分は知識階級の思惑によって捏造されたに過ぎず，その意味においてこよなく恣意的なものに過ぎない。だが，優生思想による社会観が広く行き渡った当時のアメリカにおいては，この概念はもはや寓話ではなく単なる常識に過ぎなかった。1930年に Ortega が主張した大衆粛清の衝動は，1931年の *Sanctuary* において既に社会悪の規定の寓話を通じて必然性を伴って現実化していたのである。今問われているのは，この小説を悪の寓話として読むことそれ自体ではない。問題なのは，*Sanctuary* が持つ寓話と

しての reality なのだ。この中に現れる real な悪の諸相が知識階級によって選ばれた者達の幻影でしかないことを，しかしながら我々が認識することは難しい。社会悪の寓話としてこの作品が持つ reality は，それ程に「民主的」なのだ。この意味において，*Sanctuary* は Ortega が越えられない壁を既に越えている。それはまた，知識階級自身が越えられなかった壁でもある。読者＝大衆に「社会悪の寓話」の reality を説くこの小説は，知識階級の実現できなかった大衆粛清の幻想の simulation であると共に，当時のアメリカにおける優生思想の実践と，それによって再弁別化／再階層化されてゆく社会の平行テクストでもあるのだ。

もちろん *Sanctuary* をこの様に当時の社会的文脈の中に開いてみたところで，それが即座に Faulkner が告発されるべき反民主的エリート主義者であることを示すとは言わない。だが，この小説の射程にはその社会的文脈を構成する様々なイデオロギー—人種主義，民族主義，純粋主義は言うに及ばず，強大な資本の論理に支えられた帝国主義，そしてその究極の結末としての全体主義—が含まれている様に思えてならない。とすれば，Faulkner の時代にアメリカが辿った道程は多くの Fascist 国家と何が異なると言えるのであろうか。だが，この問題はさらに別の Faulkner 作品において考察されるべき課題となろう。

注

(1)例えば，米本昌平はドイツにおける社会進化思想が民族衛生学(Rassenhygiene)へと結実する過程でドイツ青年運動の国粋主義思想と結託し，Nazism の「科学的」合理主義の理論的基盤となった事実を指摘している(268-82)。

(2)例えば Julian Huxley の1964年の著書によれば，人間という種は依然として未完成であり，未来において改良(improvement)の余地があり，それを実現するためには，遺伝的欠陥を持つ者や劣悪種(genetically defective or inferior types)の繁殖を阻止し，さらには人口の過剰増加や世界の諸地域における高い生殖率を抑制する必要があるという。そしてその手段として有効なのが優生学であると彼は主張する(252)。彼の提唱する優生学理論は，一方では Nazi 等が採用した民族的・人種的純粋主義の神話を退けてはいるものの(257)，劣悪種や望まざる遺伝子の拡散を断種術や避妊術によって防ごうとする「消極的優生学(negative eugenics)」と，選択的に優良な精子と卵子を受精させることで好ましい遺伝子の増殖を目指す「積極的優生学(positive eugenics)」(268)とが，共に人口問題の解決と「人類の進歩的改良」(279)のために不可欠であると説いている。言うまでもなく彼の主張は多分にエリート主義的であるが，人間という種の人為的操作をこの様に楽観的に正当化するこれらの主張が今世紀を通じて社会思想の中に連綿と息づいているのは紛う方無き事実である。

(3)富山，Degler，Hofstadter の三者が共に挙げている例を引き合いに出せば，それを象徴するものとして，精神薄弱（遅滞）を初めとする様々な犯罪素因と遺伝との関係を探った古典的事例である Henry Herbert Goddard の Kallikak 一族の研究がある。*The Kallikak Family, A Study in the Heredity of Feeble-Mindedness* と題されたこの研究は，図らずも優生保護の必然性を強く社会に提起する結果をもたらした(Degler 37-40)。

(4)劣悪形質，特に精神異常(insanity)の遺伝による退化(degeneration)の概念は，当時道徳的な因果応報という意味合いに彩られていた。Gamwell と Tomes は，精神異常の遺伝は自然の摂理であり，親の不品行が次世代の弱体化をもたらすと言った類いの理論が当時の社会規範を，殊に慣習的な性役割を個人に強要したり，売春等の非道徳的行為を抑制する際に正当化していたことを指摘する

(124-127)。また彼女達によれば，Spencer の社会進化論と病理解剖学との結託が，「自国の上流階級に生まれた白人であるアメリカ人(white, native-born, upper-class Americans)」(132)の優越を裏打ちしていた。つまり，一方では社会進化論的な適者生存の法則が社会における階級差を自然淘汰の結果であるとして正当化すると共に，それを医学的見地から説明するために用いられた解剖学的な人種的特質の差が，アングロサクソン系アメリカ人の優越性の神話を保証していたと言う。つまり，"high-brow" な顔付きのサクソン系人種は "low-brow" な他の人種よりもより「進化した」優秀な人種であるとか，或いは側面から見た際の顔の角度が人種の進化の程度を表しているとか言った理論が，知能テストに見られた人種的差異と結び付けられて人種・民族差別を正当化しまた助長したというのである。ここから，人種間の進化の程度差のために，幼少期には白人と同等の知能を持っていた黒人種も，成年期までには知能の発達に顕著な遅れが生じるのだと言った理論が捏造されたりもしたのである(132-134)。

この様に肉体的・解剖学的差異を人類の進化の程度差と見做し，より進化した種こそより優秀な種であるとする考えは，進化論的見地から見た退化人間（先祖帰り）としての肉体的特徴が犯罪者に分類される人々を特徴付けていると提唱する Lombroso の生来的犯罪者説と同根である。ピエール・ダルモンによれば，この生来的犯罪者説は，犯罪者の身体的異常や反社会的行動は「幼児期に成長が止まったために起こる退化の経過の病的な結果」(63)であり，またその様な退化の形質は（隔世）遺伝する(64-65)と考えられたという。そしてこれら身体的欠陥を先天的に持つ生来的犯罪者に含まれるのが，「癲癇患者，背徳症（道徳的狂人），精神病に罹患した精神薄弱者」(67)なのである。繰り返せば，これらの思想が，アメリカでは移民法や断種法として結実したのである。

(5) Horace を知識人(an intellectual)と見做す視点は，例えば Brooks 116, Judith Lockyer 11, André Bleikasten 217-18等にも窺える。特に Bleikasten は，Horace はアメリカ南部社会の中産階級における高等教育を受けた人々，即ちより穏健となった近代南部紳士像の典型例であると共に，彼に代表される知識人の姿はその社会的・心理的側面においては多分に作家 Faulkner のそれに類似していることをも指摘している。ただし，この様な Horace の多分にブルジョア的な自我も，Pamela E. Knights の指摘する通り「彼自身自らが否定したがっている［現実世界］から成っている」(4)こともまた事実であろう。

(6) Millgate によれば，Temple の偽証は彼女を Popeye の為すがままに放っておいた Goodwin や Ruby に対する一種の復讐の意味があるとされる(164)。また Terry Heller は，Goodwin を陥れようとする Narcissa にも同様に，次の様な論理が働いていると見ている："Narcissa's view is that Goodwin is a bootlegger and murderer, who lives with a whore and, therefore, deserves violent destruction; by threatening her social position, Goodwin is violating a lady, so it is apprpriate that he also be a perverted rapist" (249).

(7)例えば Horace によれば，Popeye の Goodwin 一家に対する不吉な影響力は "Popeye's black presence lying upon [the Goodwins] like the shadow of something no larger than a match falling monstrous and portentous" (121)と形容されている。また以下の引用に窺えるように，the Old Frenchman place に迷い込んだ Temple の不吉さを Ruby は予感している。

> "Listen. If I get a car for you, will you get out of here?" she [Ruby] said. Staring at her Temple moved her mouth as though she were exper imenting with words, tasting them. "Will you go out the back and get into it and go away and never come back here?"
>
> "Yes," Temple whispered. "anywhere. Anything." . . .
>
> "It's not Lee I'm afraid of. Do you think he plays dog after every hot little botch that comes along? It's you." (60-61)

(8) *Sanctuary* における群衆(crowds)はこの様にリンチする暴徒(the lynch mob)として類型化され

ているが，例えばNicolaus Millsによれば今世紀の群衆はむしろ社会構造の変革を要求する集合的表現の手段であり，また時としては制度の代理者として機能する非特権階級の権力源として見做されるべきである(4-6, 77-79)。

(9)付け加えておけば，彼等が体現する悪は，Brooksも指摘している様に多分に性的connotationを持っている。例えばAlbert J. Guerardは，*Sanctuary*における悪はPopeyeの性的不能性やTempleの神経過敏な程の性衝動を包摂する，或いはそれらに象徴されると見ている(156)。また悪と性へのinitiation，殊に女性のそれとの関連はFaulknerの作品においてしばしば指摘される。例えば寺沢みずほは，*Sanctuary*を初めとしたFaulkner作品を，女性を性的な穢れから救うことでその女性性を男権主義的秩序の下に支配し，そうすることで自らの自我や社会の安定と秩序の回復を図る南部社会的気質が貫流していることを指摘している。この意味において*Sanctuary*は「女の性的穢れを阻止すること」によって「正しい世界の壊滅を阻止」せんとする「呪術的な作品」(107)であり，「テンプルが肉欲の権化となる時，彼女は邪悪の権化ポパイと等質のものになる」(123)，即ち女性の堕落＝悪＝社会秩序の壊滅という類型がこの作品を規定していると寺沢は論じている(105-152)。

引用文献

Bleikasten, André. *The Ink of Melancholy: Faulkner's Novels from* The Sound and the Fury *to* Light in August. Bloomington: Indiana UP, 1990.

Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country.* 1963. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1990.

Carey, John. *The Intellectuals and the Masses: Pride and Prejudice among the Literary Intelligentsia, 1880-1939.* London: Faber and Faber, 1992.

ダルモン，ピエール.『医者と殺人者—ロンブローゾと生来性犯罪者伝説』 鈴木秀治訳. 東京：新評論，1992.

Degler, Carl N. *In Search of Human Nature: The Decline and Revival of Darwinism in American Social Thought.* New York: Oxford UP, 1991.

Faulkner, William. *As I Lay Dying.* New York: Vintage, 1990.

——. *The Portable Faulkner.* Ed. Malcolm Cowley. 1946. Rev. ed. Harmondsworth: Penguin, 1967.

——. *Sanctuary.* New York: Vintage, 1993.

Fiedler, Leslie. "Pop Goes the Faulkner: In Quest of *Sanctuary.*" *Faulkner and Popular Culture: Faulkner and Yoknapatawpha, 1988.* Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1990.

Fowler, Doreen. *Faulkner's Changing Vision: From Outrage to Affirmation.* Ann Arbor: UMI Research P, 1983.

Gamwell, Lynn and Nancy Tomes. *Madness in America: Cultural and Medical Perceptions of Mental Illness Before 1914.* Binghamton: Cornell UP, 1995.

Guerard, Albert J. "Faulkner's Misogyny." *William Faulkner.* Ed. Harold Bloom. Modern Critical Views Ser. New York: Chelsea House, 1986. 143-70.

Heller, Terry. "Mirrored Worlds and the Gothic in Faulkner's *Sanctuary.*" *Mississippi Quarterly: The Journal of Souhtern Culture* 42 Summer (1989): 247-59.

Hofstadter, Richard. *Social Darwinism in American Thought.* 1944. Rev. ed. Boston: Beacon, 1955.

Huxley, Julian. *Essays of a Humanist.* London: Chatto & Windus, 1964.

Knights, Pamela E. "The Cost of Single-Mindedness: Consciousness in *Sanctuary*." *Faulkner Journal* 5 Fall (1989): 3-10.

Lawrence, D. H. *The Letters of D. H. Lawrence.* Ed. James T. Boulton. Vol. 1. Cambridge: Cambridge UP, 1979.

Lockyer, Judith. *Ordered by Words: Language and Narration in the Novels of William Faulkner.* Carbondale: Southern Illinois UP, 1991.

Millgate, Michael. "Undue Process: William Faulkner's *Sanctuary*." *Rough Justice: Essays on Crime in Literature.* Ed. M. L. Friedland. Toronto: U of Toronto P, 1991. 157-69.

Mills, Nicolaus. *The Crowd in American Literature.* Baton Rouge: Louisiana State UP, 1986.

Nietzsche, Friedrich. *The Will to Power.* Trans. Walter Kaufmann and R. J. Hollingdale. London: Weidenfeld & Nicolson, 1968.

Ortega, José y Gasset. *The Revolt of the Masses.* London: George Allen and Unwin, 1951.

Sundquist, Eric J. *Faulkner: The House Divided.* Baltimore: Johns Hopkins UP, 1983.

Tanner, Laura E. "Reading Rape: *Sanctuary* and *The Women of Brewster Place*." *American Literature* 62 (1990): 559-82.

寺沢みずほ．『民族強姦と処女膜幻想—日本近代・アメリカ南部・フォークナー』 東京：御茶の水書房，1992.

富山太佳夫．「ポパイとは何者か—フォークナーと優生学」『文学アメリカ資本主義』 折島正司，平石貴樹，渡辺信二編．東京：南雲堂，1993. 135-60

米本昌平．「社会ダーウィニズムの実像—欠落した思想史」『時間と進化』 村上陽一郎編．東京大学教養講座4. 東京：東京大学出版会，1981. 259-82